

郷愁

日下部 メイコ

十二月二十二日、私はいつものように授業を終えるとひとり暮らし先のアパートに帰った。

六畳一間、家賃はぴったり三万円。大学まで徒歩五分、半径三百メートル以内にスーパーとコンビニがあるという優良物件だ。

「ただいまー」

誰に言うわけでもなく玄関を開けて靴を脱ぐ。狭い土間でブーツを脱ぐのは手間だ。この前なんか、朝の忙しいときにどたばたとブーツを履くのに苦戦したおかげで、ドアノブに膝をぶつけて青あざをつくってしまった。今も見事な色をしている。

カラータイツを履いた足で台所を通り過ぎ、ふすまで仕切られた畳敷きの部屋に入る。東側の壁にベッド、西側の壁際に本棚とテレビが置いてある。南の窓はカーテンが閉められておらず、まだ四時だというのに真っ赤に染まった空がすりガラスの向こうに見える。私はカーテンを閉めると、ベッドの上に放り投げられていたリモコンを手に取りボタンを押した。ふちん、と電源の入る音がして画面が明るくなる。いっぱい映し出されたのは

どこかのクリスマスイルミネーションだった。アナウンサーがリポートする後ろを恋人たちや家族連れが歩いていた。

世間は明々後日に迫ったクリスマスにすっかり染まっている。恋人もなく、実家から離れてひとり暮らしをする私にはまったく遠い話であることよ。明日のクリスマスも学校の授業はある。またつく教授もDSだ。それにももちろんバイトもある。アパートのすぐ近くにあるスーパーでバイトする私に、ゴールドデンウィーク、お盆、クリスマス、そして年末年始でまともな休みがあった例はない。サービスマスのさがだろう。今年も年末年始はここでひとり過ごすのだ。バイトを初めて二年、すでにあきらめの境地である。

私はテレビ画面の左上にある時刻表示を眺めながら立ち上がった。五時から今日もまたバイトがある。閉店までのシフトだから、出かける前になにか軽く食べておかないともたない。昨日つくったコンソメスープはまだ大丈夫だろうか。冷蔵庫に入れるのがめんどうでコンロの上に放置してしまったのだが。

そんなことを考えつつ、私は台所に向かった。

「あれ、着信あり」

バイトが終わり、更衣室で制服を脱ぎながらケータイ

を確認すると、ディスプレイに『着信四件』と表示されていた。見ると、実家からである。かけ直そうかとも思ったが、すでに時刻は午後十一時を回っている。こんな時間にかけてたら夜の早い実家の母や祖母、弟や妹を叩き起こすことになってしまう。特に祖母はこんな時間まで私が起きてバイトをしていると知ったら激怒するだろう。女子たるもの夜八時以降は外を出歩くべからず、というのがひとり暮らしをするに当たって祖母から授かった訓戒だ。まあそれは入学して一週間目の新歓の飲み会で早速破られてしまったわけではあるが。

明日かけ直すか、と思つて私はケータイを閉じた。着替え終えた私は、お先に失礼しますー、と店長と正社員さんに声をかけて帰ろうとしたところを呼び止められた。

「遠野さん、帰省しないの？」

正社員さんに言われてえへらと曖昧に笑った。

「やー、あんま考えてないです。大晦日って私シフト入つてましたよね？」

「あ、入つてる。でも大晦日は閉店が一時間早くなるし、元日は遠野さんシフト入れないつもりでいるんだけど」

「それなら」

帰れるかも、と私は頭の中で考えた。確か地元までの電車の最終が十一時ちよつと過ぎぐらいにはあつたはず。閉店が一時間早まるなら十時には家に帰れる。駅までは

バスで三十分もかからないし、大晦日の特別ダイヤでも最後の一本が十時半だったから間に合う。

たぶん帰れます、と答えると、店長と正社員さんはほつとしたような顔を見せた。

「そう、よかつた。それで、あと新海さんと藤井さんにも元日のシフトは入れないからつて、言つておいてもらえる？」

「あ、はい。わかりました」

私は頷きながら、今年はどうしたのだろうと首をかしげた。

今名前の挙がつた人は全員アルバイトで、他県からここにひとり暮らしをしている人だ。去年は無言を言わず元日も働かされていたのどうしたのだろう。会社の経営方針でも変わったのだろうか。元日は家族水入らずで過ごしましょう。だからつて変だ。

しかし一介のバイトに会社経営に口出しできるような権限はないので、伝えておきますとだけ答えて私は鼻息も白くなるような夜空の下自転車で帰宅した。こりやーホワイトクリスマスかも。

ぶー、ぶー、と耳元で唸るケータイで私は目を覚ました。あーマナーモードのまま寝ちゃつたのか。今年も紅白が白が勝つたなあと寝る直前のことを思い出しながら

ばかりと開く。日づけが変わって新年おめでとー！ みたいなハイテンションについていけず、さつさと風呂に入って寝てしまったのだ。今年もきつとこんな感じで乗り切れないんだろうなあと思うと若干落ち込む。これでもいいのか女子大生。

「はい、もしもし」

『ゆき子？』

「おかーさん。おはよー」

電話は実家の母からだった。間の抜けた声でぬぼーつと言うと、あんた今起きたの、と呆れたような声が聞こえる。そういえばもう十二時近い。あんなに早く寝たのにずいぶん起きなかつたものだ。最近バイト三昧だったから疲れていたのかもしれない。

『あんた、なんで帰ってこなかつたの』

「あーうん、なんかめんどうくさくなっちゃってさあ」

あは、と笑う。

結局のところ、私は帰省せずにひとり暮らし先で年を越した。昨日までバイトだなんだで忙しく、帰省の荷物をなにもまとめていなかったのが最大の要因と考えられる。バイトで参っている私に、帰宅してからのボストンバッグの中に着替えを詰め込んだりなんたりする元気はなかつたのだ。それにあの時間帯は泣きたくなるほど寒く、外に出ていくのがかつたかつたのもある。「まあいいじゃん、成人式には帰るんだから」

今年、私は成人した。だから年始に帰れなくてもどうせ帰省するのだ。わざわざ帰らなくてもいいだろう。元日に実家に帰り再びこつちに戻り、成人式にまた実家に、というのでは交通費もばかにならない。こちとら学生なのだ。

『なに言ってるの！ 今日バイトは？』

「ないけど」

『じゃあ帰ってきなさい、すぐに』

「なんでよ。私二日からシフト入ってるのに」

私は目を丸くした。耳元で、いいから帰ってきなさいを母親がくり返している。どうしたのだろう。変に食い下がるというかなんというか。去年……もう一昨年か、に年末年始は帰れないって言ったときよりもしつこい。

「お母さん、なんかあつたの？」

『……』

母親が黙り込んだ。そんなに深刻なことが起きたのかと思つて私は身を固くする。少しの間沈黙が落ち、ぼそぼそと話し合う声が遠くに聞こえた。人の動く気配がする。

『もしもし、ゆき子か』

「お父さん!？」

おどろいてケータイをつかみ直した。なんでお父さんが。父親は十年前から海外に単身赴任している。めつたな

ことがない限り帰ってこないの、一年に二回会えれば多いほうだ。しかし私が大学に進学してからはタイムミンが悪く、声を聞いたのは実に一年半ぶりだろうか。

『ゆき子、よく聞きなさい。今は事情があつて話すことができない。だからとにかく、まず帰ってきなさい。それから話をするから』

いつにない父親の深刻な声に私は思わず黙って頷いたが、あわてて、うんと返事をした。

私は通話を切ると、すぐさまバッグに荷物を詰め込んだ。一日ぶんの着替えと、ケータイの充電器と財布があれば充分だろう。パジャマも歯ブラシも、身の回りのものは実家に置いてある。

コートを羽織りマフラーを巻き、手袋をポケットに突っ込んで玄関でブーツを履いていると、突然にインターホンが鳴った。

元日から誰だ？ と不審げに覗き窓から外を見ると、小柄なおばあさんが立っていた。

「遠野さん？ 大家の桜井ですけど」

「あ、はい！ 今開けます！」

大家さん！ 二年このアパートに住んでいるが、その姿を見るのは今日でまだ二度目だ。とんでもなくレアな人とまさか元日から遭遇するとは夢にも思わなかった。

鍵を開けてドアノブに手をかけると、急に外から引張られた。え、と思う間もなくドアが全開にされる。

「遠野ゆき子だな？」

「はい」

反射的に答えてしまいがち、私は頭が真っ白になっていた。

なんだこれ。

外にいたのは大家さんだけではなかった。がたいのい、眼光の鋭い男の人と、ひよろつとした感じの男の人のふたり組。中年ぐらいの人と、私より少し年かさだが、若い人だ。若い人のほうはなにか書類を持っている。どちらも警官の制服のようなものを着ていた。それは、少し前の夜に見た、日本列島二十四時の、機動隊とかそんな感じの人が着ている服に似ていた。

「写真の本人と一致しています」

「よし。ただ今から、一切の外出を禁止する」

思わず聞き返した。

「え？ なんですか？」

「詳細は明日、テレビ、新聞、ラジオ等で確認するように」

以上、と言って男の人ふたりは行ってしまった。かんかん、と階段を下りていく音が聞こえた。下の回で、鈴木さん、大家の桜井ですけど、と言っているのが聞こえる。すべての部屋を確認してアパートに人が残っていないか調べているようだった。

私はドアを開けたままぼんやりしていた。

大家さんはすべての部屋を確認し終えたらしく、男の人たちに深々とお辞儀をして歩き去っていった。どうやら、このアパートに残っているのは私だけらしい。

残ったふたりは、中年の人のほうが二言三言若いほうになにか告げ、胸元の無線でやり取りをしている。そうして中年の人のほうは若いほうを残してどこかに行ってしまう。若いほうはアパートの階段の横に警戒するようになっている。

身体の芯からぶるりと震えが来て、私はドアを閉めた。寒い。鍵をかけながら考える。なんだ。なんで警官っぽい人が来たんだ。

事件だろうか、と思う。テレビを点けてみるが、華やかでおもしろみのない特番ばかりでわからなかった。しかし、事件にしては妙だ。

近くでもし重大な事件が起きたとして、こんなに一方的に外出を禁止されるものだろうか。わからない。

私ははっとしてあわててケータイを開いた。状況はよくわからないが、実家に連絡しなければ。メモリから番号を呼び出して発信を押し、耳に当てる。

『ただ今、この電話機は使用することができません』  
なに？

故障？ 電波障害？ 混線？

困ってしまった。どうやって連絡を取ったものか思案し、メールだと思い立ってパソコンを起動させた。しか

し、ネットに接続できない。何度やってもエラーだ。

大規模なサイバーテロでもあったのだろうか。こんな害が出るかどうかはよくわからないが。

原因を見つけられないまま時間は過ぎ、日も暮れ、私はただ寝入るしかできなかった。

翌朝、私はバイトに行く準備をして部屋の鍵を開けた。外を窺うと、あの昨日の若い警官が、昨日見たときと同じま階段の横に立っていた。

「お、おはようございます」  
「おはようございます」

とりあえずあいさつしてみた。なんだか疲れているように見える。

「一晩中そこにいらつしやったんですか？」

「職務ですから」

「はあ、大変ですね」

公僕は厳しい。

思いつつ外に出ようとしたら、その人がものすごい速さで階段を駆け上がった。

「外出は禁止されています」

「はあ、でもバイトがあるので……」

「いかなる理由であっても外出は禁止されています」

徹夜と思しき青白い顔でびしゃりと言いつつ。反論を許さない雰囲気は呑まれて押し黙った。店長になんと言いつつ、黙ったのか。

「いつぐらいからなら出てもいいですか？」

「わかりかねます」

ええー、犯人捕まってるのかなあ。

「お巡りさんは、ずっとここにいらっしゃるんですか？」

「はい」

それは大変だ。私は家の中に引込むと、買い置きしていたカイロを手渡した。

「あー、百均のなんで、長持ちするかどうかわかんないですけど」

一日中外にいるのはつらからう。こんな年の初めから市民の安全を守るのも重労働だ。

するとお巡りさんはおどろいたような顔をしたが、ありがたうございますと受け取って階段を下りていった。

鍵をかけながら腕組みをする。バイトに行けない、外にも出られない、ではどうすることもない。とりあえず掃除するか、と窓を開け押し入れから掃除機を引っ張り出した。

大きな変化が起きたのは正午のことだった。

ピロロロ、と臨終ニュースを伝える電子音が入って、画面が切り替わった。まじめな顔をしたアナウンサーが原稿を読み上げる。

『臨時ニュースをお伝えします。つい先ほど、京都が日本からの独立を述べる声明を発表しました』

私は昼食のスープ春雨をテーブルにこぼした。

広がっていくかき玉と中華風スープをふきんで食い止めながら、目と耳はテレビに釘づけだった。

『近畿地方はこれを支持し、また同様に独立を求める声明を発表しました。次いで、北海道、東北、中部、中国、四国、九州、沖縄も独立を求める声明を発表しています』

アナウンサーは冷静に原稿を読み進めていく。

『いずれも、関東に集権する日本政府への不満が述べられており、各地方に住む関東地方出身の市民を人質として独立を要求しています。——みなさん』

不意にアナウンサーが画面のこちら側をにらみつけた。『こんなことが許されていいのでしょうか。なんとという非人道的な行為！ これはもはやテロです。私たち関東地方市民は一致団結し、この要求に決して膝を屈してはならないのです！』

わあ！ と画面の向こうで歓声が上がった。

私は這うようにして進み、ドアを全開にした。階段の横でお巡りさんが無線でやり取りをしている。私に気づくと、ぷつりと無線を切った。

「お、お巡りさ、これ、……」

「あなたの本籍地は東北ですね」

「え、あ、はい」

「各地方が関東の市民を人質に取ったように、私たちも他道府県の市民を人質にしているんです」

お巡りさんは、ふうとため息をつき、

「つまり、あなたは東北地方に対する人質ということですよ」

と肩をすくめて見せた。  
頭が、真っ白になった。

気づくと、空が茜色になっていた。ぼんやりと起き上がってテレビを点け、これが悪い夢だったらなあと思っただがやはり現実で、この相次ぐ独立宣言と関東出身者の安否について特集が組まれていた。

ドアを開けて外を見ると、やっぱりお巡りさんは階段の横に立っていた。

私はお湯を沸かすとポットに入れ、マグカップとお茶葉のパックをお盆に載せて外に出た。たんたん、と階段を下りると、お巡りさんが私に気づいた。

「外出は」

「や、そういうんじゃないんで。これ」

お盆を差し出す。

「今夜も冷えるらしいので。よかつたら」

差し出してから、受け取ってもらえない可能性に気づいた。毒入りとか、そういうことを疑われるかもしれない。なにせ私は人質らしいのだ。

「すみませんね」

とお巡りさんは受け取ってポットからお湯を注いで、

マグカップで緑茶っていうのは新しいですなえと笑った。

「これ、いつまでですか」

「さあ。わかりかねます」

お巡りさんは曖昧に首をかしげた。

どうしていいのかわからなかった。

気づくと、私、と口を開いていた。

「帰省してこつちに戻ってくるとき、ずっと『じゃああつち戻るね』って言ってたんですけど、この前の帰省のとき、『じゃああつち帰るね』って言ったことに気づいたんです。私にとつての故郷は確かにあつちですけど、こども私にとつては大切な場所なんだなあって思ってた」

お母さんたちのことはすごく心配だし帰りたい。けど、こつちでできた友人で、ここが地元である子たちも大丈夫かなあって心配する自分もいる。

お巡りさんはため息をひとつついた。

「人の故郷はひとつには限らないもんですね。私も生まれるはここですが、京都の学校に通っていたこともあるんです。あんまり大きな声じゃ言えませんが、今だつてあそこは大好きですよ」

そう言つて笑うお巡りさんに、なんだかほつとした。

\*\*\*

二〇××年、関東優越に対する不満を地方都市が爆発させ、日本国内で内紛の勃発。平定までに十余年を要し、新体制をとる日本連合国が成立。  
日本連合国初代大統領に、遠野ゆき子が就任。